

### 第3回 ワイルド劇上演

ワイルド劇上演と言えば *Salome* という印象は、特に日本のワイルド劇上演史を見ると特異な現象かもしれない。シェイクスピア劇では *The Merchant of Venice* (『ヴェニスの商人』)、*Hamlet* (『ハムレット』)、*A Midsummer Night's Dream* (『夏の夜の夢』)、*Twelfth Night* (『十二夜』) の上演が多いなどの特徴がある。ワイルド劇上演の特徴について石崎等は「ワイルドと日本演劇」の中で次のように述べている。

H. イプセン(1828-1906)の作品が近代日本の演劇に及ぼした圧倒的な影響(「イプセン模倣劇」と称される)に比べると、ワイルドの場合は、風習喜劇や悲劇の受容がまったく無視され、『サロメ』1編だけであったということもあり、その影響関係はとうてい比較にはならない。ワイルドと日本演劇の関係は『サロメ』受容に集約されると言って過言ではない。<sup>(1)</sup>

ここでは特に *Salome* 上演に焦点を絞りながら、日本における *Salome* 受容の特異性について明らかにしていきたい。

#### (1) アラン・ウィルキー一座

ワイルド劇上演では大正元年(1912)のアラン・ウィルキー一座による『サロメ』・『フロレンタインの悲劇』をはじめ、近代劇運動の流れや女優の進出といった演劇界の動きの中、特に『サロメ』は頻繁に上演された。

アラン・ウィルキー一座の上演は大正元年(1912)11月9日に横浜ゲイティ座で『サロメ』と『フロレンタインの悲劇』、11月11日～15日までは帝国劇場で『サロメ』が上演された。小山内薫、佐佐木信綱(1872-1963)、大仏次郎(1897-1973)、芥川龍之介、島村抱月等がハンター・ワッツの演じる『サロメ』を観劇したのである。主な配役は次の通りである。

|            |              |
|------------|--------------|
| ヘロデ・アンティパス | アラン・ウィルキイ    |
| ヨカナーン      | スタンフォード・ドウソン |
| 若いシリア人     | アーサー・グッドセール  |
| ヘロディアス     | G.リトルウッド     |
| サロメ        | F.ハンター・ワッツ   |

座長アラン・ウィルキイ／舞台監督アーサー・グッドセール／舞台装置  
ジェー・ノルバーン

横浜公演 大正元年十一月九日（土）午後九時開演 山手ゲイティ座<sup>(2)</sup>

特に、この上演は島村抱月が芸術座で『サロメ』を取り上げる一年前であったことは注目に値する。当時の劇評などから帝国劇場よりも横浜ゲイティ座の公演の方が、舞台装置などの演出は評判がよかったようだ。小山内薫は大正4年(1915)6月の「本郷座の『サロメ』」(『演芸画報』第2年第6号)でワッツが演じたサロメの印象をアラン・ウィルキイ座、芸術座、R. シュトラウス(Richard Strauss, 1864-1949)のオペラ『サロメ』(ベルリン王立オペラ)、近代劇協会の4つの舞台を比較して、横浜ゲイティ座上演について述べている。

道具の不足から、唯黒いカアテン(それは多分木綿ではあったが)を舞台一面に下げただけであつたが、その貧しい暗い舞台の設備が、劫つてサロメの姿をはつきりさせた。東京の時は、光線の使ひ方も拙劣であつた。

(3)

サロメ役のアラン・ウィルキイ夫人についても次のように述べている。

サロメに扮したアラン・ウィルキイ夫人の肉體は如何にも繊弱で、この女王の神秘的な一面は可なりに深く現はされたが、その肉感的な一面には缺ける所が多かつた。併し、このサロメは決して悪いサロメではなかつた。

豫言者の恐ろしい聲に、退けられては近くづき、退けられては近づきする間の、肉體のしなやかさな起伏などは、いまだに私の目を去らないである。その外の役はみんな言語道断であつた。(4)

横浜ゲイティ座のこの黒幕だけの舞台装置は、経費の問題という点もあ……ったであろうが、結果的には能舞台など、「何もない空間」の演劇に慣れていた日本人の観客には印象深かったようだ。また、森鷗外(1862 -1922)が明治40年(1907)8月の「脚本『サロメ』の略筋」(『歌舞伎』第88号)で指摘したように、「様式を命にして居る脚本」(5)の為に雰囲気が非常に重要視されている。本間久雄は大正3年(1914)1月の『『先代萩』と『サロメ』』(『演芸画報』第8年第1号)で、『サロメ』の成功の鍵は、全体にロマンチックなムードを伝えられるか、サロメの性格の演出にあると指摘している。(4)本間久雄の劇評は大正2年(1913)に上演された芸術座の『サロメ』の劇評を中心にしたもので、サロメに扮した松井須磨子については、「須磨子氏はかう云ふ方面の性格を演出するには恐らく現存の日本の女優中の随一に置かるべき人である」(6)と絶賛している。サロメ踊りについては、ジョバニ・ヴィットリオ・ローシー(Giovanni Vittorio Rossi)の振り付けは悪いと指摘している。

また、後年なってウィルキー一座のワイルド劇上演について文章をよせた芥川龍之介の指摘についても簡単に紹介してきたい。大正14年(1925)8月の『女性』(第8巻第2号)に掲載された「『サロメ』その他」の中で日本最初のワイルド劇が上演された横浜・ゲーテ座の『サロメ』『フィレンツエ之悲劇』の観劇の様子が記されている。「僕等四人の一高の生徒は日暮れがたの汽車に乗り、七時何分かに横濱へ着いた」(7)とあるが、この四人とは、芥川龍之介本人、久米正雄、原善一郎、井川(恒藤)恭のことである。(8)

ハンター・ワッツの演じるサロメの芥川の印象は、「サロメを?——いや、サロメではない」(9)、「サロメは明かに粉黛を装つたお婆さんである。顔や顎の皺は勿論、頬のこけてあることも一通りではない」(10)、「サロメさへ美しければ」(11)と評している。また、

僕は後に松井須磨子のやはり「サロメ」を演ずるのを見た。須磨子のサロメは美しい——よりも兎に角若かったのに違ひない。が、僕のいつになつても忘れることの出来ないのはあの年をとつたサロメである。<sup>(12)</sup>

とも評している。多くの観客に好評だったワッツに対して、芥川は全体的にて「サロメを演じる年老いた女優に、大きな幻滅を覚えた」<sup>(13)</sup> ということになろう。

アラン・ウィルキー一座のワイルド劇上演は、井村君江が『「サロメ」の変容 翻訳・舞台』で指摘している様に、2つの大きな意義があろう。<sup>(14)</sup>

- 1 ワイルドとシェイクスピアの本場の人々が演じる舞台が日本で上演されたこと。
- 2 最初の『サロメ』上演であったこと。

その後の芸術座の『サロメ』上演もあるが、このアラン・ウィルキー一座の『サロメ』上演が日本で最初の『サロメ』上演であったことは大きな意義のあることだ。

## (2) 芸術座

芸術座は大正2年(1913)9月に島村抱月と松井須磨子を中心に創立された。さて、日本人の演じた最初の『サロメ』は大正2年(1913)12月の芸術座による公演である。主な配役は次の通りである。

|        |       |
|--------|-------|
| サロメ    | 松井須磨子 |
| ヨカナン   | 澤田正二郎 |
| ヘロデ王   | 倉橋仙太郎 |
| 若きシリア人 | 中村哲   |

ペヂアスの侍従 宮島文雄  
ナアマン 鎌野誠一  
第一の兵卒 田中介二  
ヘロヂアスの王妃 波野雪子

中村吉蔵訳、ローシーの演出で行われたが、ローシーの演出に対しては、芸術座の主宰者の島村抱月と帝国劇場の演出担当のローシーの間に意見の相違が生じ、論争を巻き起こすことになった。ローシーは大正元年(1912)に日本の帝国劇場の歌劇部教師として招かれて来日した。生徒には石井漢(1886-1962)、高田雅夫(1895-1923)、高田せい子(1895-1977)、清水金太郎(1889-1932)、原信子(1893-1979)等が輩出している。島村抱月とローシーの『サロメ』公演での問題は、俳優の肉体上の美と表現、日本語と原文の律調の違いから来る音楽美の消失、上演時間の制約などが挙げられるが、帝国劇場のローシーが演出の全責任を負っていたことから、抱月は芸術座の主宰者でありながら、演出に携われることができなかつたことがこの論争を巻き起こす結果となった。ワイルドの移入が始まって 30 年後に外国人演出家と日本人が論争を巻き起こすまでに『サロメ』を理解し、日本人のものにするとは誰が思ったであろうか。これは島村抱月の見識の高さを表すものである。ローシーとの論争もあるが、芸術座の『サロメ』公演については、特に大正 2 年 12 月(1913)の『創造』(第 4 号第 12 月号)、無署名「古く新しい抱月須磨子」(『東京日日新聞』12 月 12 日)、小宮豊隆「帝劇の『サロメ』」(『読売新聞』12 月 14 日)、ローズイー (ローシー)「サロメの踊に就て」(『東京朝日新聞』12 月 17 日)、島村抱月「『サロメ』に就て」(『東京朝日新聞』12 月 20 日～22 日)、大正 3 年(1914)3 月の芹影女「帝国劇場の『サロメ』」(『歌舞伎』第 163 号)などがよい参考となる。

### (3) その他

アラン・ウィルキー一座と芸術座以外のワイルド劇上演は調べる限り『サ

ロメ』上演に集約される。おもな『サロメ』上演は以下の通りである。

- 1914年 5月 川上貞奴一座：松居松葉訳（本郷座）  
サロメ＝川上貞奴
- 1915年 1月 新時代劇協会：西本朝香振付（金竜館）  
サロメ＝木村駒子
- 1915年 3月 近代劇協会：森鷗外訳、上山草人企画（赤坂演伎座）  
サロメ＝下山京子
- 1915年 7月 天勝一座：森鷗外訳、小山内薫演出（有楽座他）  
サロメ：松旭斉天勝
- 1918年 原信子歌劇団一座：ローシー振付（観音座）  
サロメ：原信子
- 1918年 3月 日本バンドマン一座：猿与太郎改作、海老名左刀監督（桃色座）  
サロメ：河合澄子
- 1919年 帝劇女優劇  
サロメ：河村菊枝

サロメを演じた川上貞奴（1871-1945）、木村駒子（1887-1980）、下山京子、松旭斉天勝（1886-1944）、原信子等は松井須磨子と同様にまさに「新しい女」を代表する活躍振りであった。

## まとめ

日本における *Salome* 受容における特異性について、井村君江は『「サロメ」の変容 翻訳・舞台』の中で次の様に述べている。

サロメが高貴なイスラエルの王女で『聖書』に登場することや、この宗教上の人物を劇化したことで、ワイルドの『サロメ』は検閲にかかって

上演禁止になっていたことなどは、日本では問題ではなかった、と言うより知られていなかった。だからかえって自由な改作や受けとり方ができたのかもしれないが、そのことがまたサロメ劇のなかの「七つのヴェールの踊り」という官能的でエロティックなシーンや、「生首への恋」というサディスティックでグロテスクな二つの場面が強烈な印象を残してしまい、今日までまだわが国の一般の人達のサロメの映像を形造っている感がある。<sup>(15)</sup>

もちろん、サロメの自由な考え方が、ヨーロッパから伝わってきた「ニュー・ウーマン」の考え方、サロメを演じる松井須磨子を代表とする女優の活躍を通して受け入れられたことも大きな特徴であろう。また、佐藤美希は「文化による『サロメ』の受容——日本での受容をめぐる」の中で、日本における *Salome* 受容の特徴を 3 点挙げている。

- 1 二分法の価値観を採用しないか、またはその両極端な価値観の混在を認めていく
- 2 非現実世界や現実を超越した要素を作品の解釈にも顕著に言われている
- 3 女性の情欲を伝統的に芸術のモチーフとして認めている<sup>(16)</sup>

これらの特徴は明らかにキリスト教を文化背景に持つ西洋との解釈の違いから生じるものと考えられる。*Salome* の受容状況を考えることは日本のワイルド受容の特異性を明らかにする手掛かりとなるかもしれない。

## 参考資料

山本澄子『英米演劇移入考』文化書房博文社、1992年4月

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第15輯、

2001年6月)

## 注

- (1) 石崎等「ワイルドと日本演劇」(山田勝編／日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月)、p.506
- (2) 井村君江『「サロメ」の変容 翻訳と舞台』(新書館、1990年4月)、p.98.
- (3) 小山内薫「本郷座の『サロメ』」(『演芸画報』第2年第6号、1915年6月)、p.149.
- (4) Ibid., pp.149-150.
- (5) 鷗外漁史「脚本『サロメ』の略筋」(『歌舞伎』第88号、1907年8月)  
(引用は森林太郎『鷗外全集』第26巻、岩波書店、1973年12月、p.259による)
- (6) 本間久雄『「先代萩」と『サロメ』』(『演芸画報』第8年第1号、1914年1月)、p.53.
- (7) 芥川龍之介『「サロメ」その他』(『女性』第8巻第2号、プラトン社、1925年8月)、p.84.
- (8) 庄司達也「ゲーテ座」(関口安義編『芥川龍之介新辞典』翰林書房、2003年2月)、p.190.
- (9) 芥川龍之介『「サロメ」その他』、p.88.
- (10) Ibid., p.87.
- (11) Ditto.
- (12) Ibid., p.89.
- (13) 庄司達也「ゲーテ座」、p.190.
- (14) 井村君江『「サロメ」の変容 翻訳・舞台』、p.102.
- (15) Ibid., p.295.
- (16) 佐藤美希「文化による『サロメ』の受容—日本での受容をめぐって」(『北海道英語英文学』第48号、日本英文学会北海道支部、2003年6月)、p.78.



\* 芥川龍之介「『サロメ』その他」(『女性』第8巻第2号、プラトン社、1925年8月)は、後年『芥川龍之介全集』(第5巻)(筑摩書房)に収録されたが、その際にタイトルが「Gaiety座の『サロメ』」となっている。本書では初出の『女性』より引用したため、「『サロメ』その他」の文章名を使用した。